



戦国の世と武田氏

武田信玄の祖父・信繩(のぶつな)、父・信虎(のぶとら)の時代になると、武田氏は甲斐国の中心であった甲府盆地東部の掌握に成功。信虎は、甲府盆地東部攻略の要であった川田館から、甲府の躑躅が崎館(つつじがさきのやかた)に拠点を移しました。

息子の武田信玄の時代になると、甲斐国を拠点としながら周辺国の支配に本腰を入れます。あまりにも有名な、信州の支配権を巡る越後の武将・上杉

謙信との戦・川中島の戦い(1553年—1564年)をはじめ、周辺の武将たちと戦い、周囲の国々を手にしていきました。

しかし、信玄の次の世代になると、徐々にその勢いに陰りが見え始めます。嫡子・武田義信(ただよし)のぶ、1538年—1567年)が信玄と対立したため、諏訪にいた義信の弟・武田勝頼(ただかつより、1546年—1582年)が後継になりました。信玄の死後、勝頼は父の夢を継いで奮闘しますが、1575年の長篠の戦いで織田・徳川連合軍に大敗した事を機に、徐々に押されていきます。拠点を躑躅が崎館(甲府市)から新府城(韮崎市)に移して立て直しを図るも、義弟や家臣たちは次々と離反。織田氏・徳川氏が包囲網を狭める中、勝頼はやむなく新府城に火をかけて東へ逃れますが、追い詰められて天目山(甲州市)にて自害したと伝えられています。こうして、武田氏の進撃は終わりを迎えたのです。

このように、朝廷が押さえていた甲府盆地の平野部を避けて周縁の山地に勢力を伸ばし、やがて中心まで食い込んだ甲斐源氏、その流れを汲む武田氏。平安時代末期から戦国時代にかけて彼等の足取りをたどると、甲府盆地の中心に向かって渦巻くように、甲斐源氏たち、そしてサムライ文化が甲斐国を席卷していくのを見ることができます。



躑躅が崎館

江戸時代の『甲陽軍鑑』

武田信玄亡きあと、重臣であった春日虎綱や甥の春日惣次郎らが信玄時代の出来事や優れた家臣たちの行い・心構えなどを取りまとめました。この書物は後に『甲陽軍鑑』という書物として出版され、江戸時代には武士を中心として人気を博し、大いに流布していきます。信玄の兵法を伝える軍学書として、あるいは人生の指針となる信玄の名言を記した書として読まれた他、信玄の家臣たちの行いは主君に仕える武士の見本とされ、幼学書などでも紹介されました。このように、武田信玄と家臣たちの業績は、江戸時代の武士たちにも大きな影響を与えたのです。

現代へ続くサムライ文化

●南部氏と身延山

加賀美遠光の息子・南部光行(なんぶみつゆき、生年不詳—1215年)は、南部地域(身延町・南部町)を拠点としていました。その子・波木井実長は、日蓮聖人を身延山に招いた人物です。実長は日蓮聖人の教えに深く帰依し、身延山での活動を支えます。その後も、南部氏は身延山を支援しました。聖地・身延山の成立において、甲斐源氏は重要な役割を果たしたといえます。

一方、南部氏は東北にも展開しました。櫛引八幡宮(くしきはちまんぐう、青森県)には、源氏惣領が引き継ぐとされる由緒ある鎧・源氏八領の一つが伝来しています。山梨県南部地域と青森県、いずれも南部氏ゆかりの地。遠く離れた場所に思いがけないつながりが見いだせます。



波木井実長公銅像

●武家文化と禅宗

秩父往還の通る塩山(甲州市)周辺に拠点を構えた武田信時の流れを汲む武田氏は、当時中国から入ってきたばかりの最先端文化・禅宗の庇護に力を入れました。サムライたちにとって、自らの権力を周囲に示して地位を盤石にするために、文化的素養は非常に重要だったのです。彼らの残した仏閣は、今も塩山周辺に数多く残っています。

例えば、清白寺(山梨市)は、夢窓国師という臨済宗の高僧が開山した寺です。開基は足利尊氏とされますが、武田信武だという説もあります。向嶽寺(甲州市)は武田信武の子・信成(のぶなり、生年不詳—1394年)、慈徳院(甲州市)は信成の子・信春(のぶはる、生年不詳—1413年)、永昌院(山梨市)は信春の玄孫・信昌(のぶまさ、1447年—1505年)が開基で、いずれも禅宗の寺院です。

秩父往還周辺では、武田氏が庇護したこれらの寺院を見ることができます。点在する寺院をつなぐ彼らのストーリーを意識しながら歩くと、よりイメージが広がるのではないのでしょうか。